会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
47(1): 76-77

赤崎正人先生のご逝去を慎む
Memoires of Dr. Masato Akazaki (1926-1999)

赤崎正人先生が1999年5月12日に逝去されました．先生は，1999年2月頃から少し体調を崩され，3月中旬の精密検査の結果，大腸癌と診断されました．すぐに手術を行い，いったんは成功したのでしたが，治療法を検討するために再検査をしたところ，肺などに転移していることが判明したのです．先生はすべてを聞かせて欲しいと言われており，医師もこの人ならと判断されたのでしょう．余命が告げられ，覚悟を決められた先生は，最後の論文 (Akazaki and Seret, 1999)に使った標本をフランスに返却されたり，心残りの人に電話をされたり，身の回りの後始末を済まされました．そして転移発見から僅か3週間程でついに帰らぬ人となったのです．亡くなる直前，「好きな魚の研究が出来て楽しい人生だった．ありがとう」と奥様の敏子さんにおっしゃったそうです．享年73歳でした．

この追悼文は最初に弟子の岩槻が，次に同門の吉野が，先生の研究やお人柄を紹介して先生のご功績を称え，謹んで哀悼の意を表したいと思います．

先生は鹿児島県生まれ，昭和22年鹿児島青年師範学校を卒業後，中学校教諭や愛知学芸大学豊川分校助手などを勤められましたが，魚の研究への思い止み難く，26歳で京都大学農学部水産学科に入学され，松原喜代松先生の下で，念願の魚類の研究を始めることとなりました．人より遅いスタートではありましたが，また，経済的にもたいそう苦労されたようですが，勇気凛々楽しい学生生活を送られたとのことです．大学院ではハゼの研究をしたかったのですが，松原先生から「君はタイをやりなさい」と言われたそうです．その後，敏子さんと結婚，苦労をともにされながら，昭和37年に学位論文を完成されました．京都大学みさき臨海研究所特別報告としてまとめられた「タイ型魚類の研究—形態・系統・分類および生態—」です．スズキ亜目内の科同士の関係や系統類縁が非常に混乱していた当時，外部・内部形態の詳しい調査研究により，イトヨリダイ科，タイ科，およびフエフキダイ科はタイ型魚類として定義されるという考え方を，先生は世界に先駆けて示されたわけです．これは日本語で書かれていたのですが，画期的な内容を伝え聞いたD. G. Johnson博士などは，英語に訳させてまで読んだとのことです．世界の魚類学者達に強く影響を与え，魚類学の基礎的知見において日本から世界へ新風を送った内容であったと言えます．

故赤崎正人博士と奥様の敏子さん（1997年6月イギリス大英博物館にて）

昭和37年4月から近畿大学水産研究所に勤務，その間淡水養殖に苦労なさったようで，折々思い出話に花が咲きました．このときお世話になった方々にも，ご入院前の最後の旅でお別れをなさったとのことです．その後，昭和45年9月に宮崎大学農学部に赴任され，平成3年3月に定年退官されるまで21年間にわたり，学生の指導，多岐にわたる研究，及び諸学会の発展へのご尽力をなされ，魚類学会では長年評議員も勤められました．退官後は，大分生態水族館の顧問と国土開発コンサルタントの技術顧問もされていました．

先生は，鹿児島生まれの鹿児島育ちで豪放磊落な九州人らしさがあるかと思えば，よく気のつく優しい方で，誰とでも気さくに接してくださり，会えば気軽に声をかけてくれます．魚類学会や水産学会等で，先生のこのような暖かなお人柄に触れた方も少なくないことと思います．学生が魚を調べていると，先生がやってきて，「何のサカナか分かった？おもしろいだろ，サカナって本当におもしろいんだよ」とそれだけ言われると，「ハッハッハアー」と笑って出ていかれたものでした．初めはなんと変わったおもしろい先生だろうと思いましたが，これが先生の特有の教育方針だったのです．今から考えると，先生は，自分で見て，そして考えて，新しい事実をみつけておもしろいと思えるよう教えてくださったのだと思

います．また先生は，よく「魚から学べ」や「魚が先生です」と言われ，本や文献で書いてあることより，まず自分の目で見て感じたことが大事だということを強く言われていました．

先生の研究活動は極めて多岐にわたり，大学院時代のタイの研究に始まって，近畿大時代には淡水養殖や寄生虫の研究もされていました．宮崎大に赴任されてからも淡水養殖，日向灘の漁獲物調査，新種の発表，宮崎県北部の五ヶ瀬川のアユを中心とする魚類の生態調査や県内の魚道の調査・研究に熱心に取り組み，数々の論文や報告書としてまとめられています．退官後も「赤崎魚類研究所」の看板を掲げ，宮崎県内の河川の生物環境調査など奥様とご一緒に元気になさっておられました．落ち着いたらまたタイの研究に戻るよと仰っていた矢先のご発病ご逝去でした．（以上，文責岩槻）

私（吉野）が松原先生の指導を受けるようになったのは，昭和41年からでしたので，赤崎先生は4年前に近畿大学へ移られた後でした．教室内の書棚にあった先生の学位論文である「タイ型魚類の研究」の分厚さと，タイ類の見事な図に圧倒されたのを昨日のように憶えています．その後，魚類学会等で先生にお目にかかることはあったものの，後輩としての挨拶をするぐらいでした．昭和46年の夏，「そちらへ採集旅行に行く」との連絡が沖縄に滞在していた私の所へ届きました．ちょうど本土復帰の1年前で，渡航にはまだパスポートの必要な時代でした．その後の10日間ほどは毎日沖縄各地の魚市場に足を運び，熱心にタイ型魚類の観察・採集をされていました．先生はその前年に宮崎大学に移られ，近畿大学在職中には中断していたタイ型魚類の研究を再開するべく意欲に燃えておられた時でした．またこの機会に，先生から直接，タイ型魚類の分類を現場で教えて頂くことができました．しかしながら，先生の知識をもってしても不明なタイ類が市場で見られることに驚くとともに，学問の奥深さを実感したものです．

当時は，現在のように外国から簡単に文献のコピーを取り寄せることなどは考えられない状況でしたので，学会の開催時を利用して，東大や東水大で古い文献の探索を行いました．それまでの日本産魚類の分類では，Jordan 以降の文献でほぼまかなえる状況で，Temminck & Schlegel や Steindachner & Doderlein を除いて，古い文献は必要不可欠なものではなかったようです．けれどもインド—太平洋に広く分布する魚類を対象とした場合にはそんな横着は通用しません．そんなこともあって先生と二人がかりで，Bleeker の Atlas 全図版を半日かけてカラー写真撮影したことがあります．このコピーはその後 Atlas が復刻されるまで，重要な資料として大いに活躍しました．しかし，文献のみに頼った同定では限界があり，模式標本の再検討が必要なことを先生は痛切に感じておられたようです．

昭和51～52年にかけて，先生はアメリカ・ヨーロッパの大学や博物館をまわり，タイ型魚類の模式標本の調査を実施されました．その仕事ぶりは徹底したもので，後年私がヨーロッパをまわった時に，至る所で先生の足跡を見ることができただけでなく，各博物館の curator の記憶にもしっかりと残っていました．その足跡が，当時東ベルリンにあったフンボルト大学の博物館にも及んでいたことは驚異としか言いようがありません．

赤崎先生以前に日本で行われた魚類の系統分類学的研究は，日本産の種類のみを扱ったものがほとんどでした．先生の学位論文は，当時としては珍しく，world-wide review を目指していたように思われます．もちろん当時の社会的状況では充分なことはできなかったでしょうが，きわめて先進的なものであったことは確かです．

赤崎先生は，タイ型魚類の多くの標本と資料を残されています．亡くなる数日前にやっと出来上がった「赤崎魚類研究所」の封筒と便せんは無念さを伝えています．これらを利用してもう一仕事，タイの研究をして，大学院で始めた研究を自らの手で完成させたかったろうと思います．しかし，タイの研究に始まり，最後のレンコダイの新種論文をみることなく帰らぬ人となったが，タイの研究でやはり錦を飾られたと思います．

最後に，奥様の敏子さんの短歌を掲載して，先生のご冥福を祈りたいと思います．

フランスより今日届きたり亡き夫の新種の鯛の最終論文　　敏子

（吉野哲夫　Tetsuo Yoshino: 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1　琉球大学理学部；岩槻幸雄　Yukio Iwatsuki: 〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1　宮崎大学農学部）